

団地／それぞれの住まい歴調査 vol. 6

- 日時：2014年1月30日（木）15:00~17:00
 ■場所：男山団地中央センター1階 だんだんテラス
 ■参加者：
 ◇居住者：
 Bさん
 ◇KSDPメンバー
 ・星田：H
 ・安原：Y
 ・芦田：A

H：自己紹介しましょうか。
 Y：今回の研究をしています研究員なのですが、Yと申します。
 B：Bです。
 H：Hです。
 Y：ある程度聞いていただいているかと思うんですけど、これまでどのように過ごしてこられたか、男山だけに限るんじゃないかって、それ以前についても、その方の歴史をうかがうという。
 B：ああ、はい。
 Y：これまでお話をうかがってきまして、たまたま女性の方ばかりだったんです。今回初めて男性の方にお話をうかがうということで。
 B：ぼくの、人生ですか。
 Y：そうなんです。それとなく語っていただきました。
 B：はい。ぼくはね生まれは九州の小倉です。
 Y：ああ、そうですか。
 B：小倉で生まれて、呉に行ったんです。
 Y：はい。
 B：親父が呉の海軍工廠に行っただけから。呉で五つまでおったのかな、昭和15年くらいまで。五つの時も呉の空襲が激しくなって、防空壕へよう逃げました。ちょうど呉の山のところに家があったから、呉が空襲警報発令というたら、防空壕に逃げてました。いつも防空頭巾被ってね。でも空襲が激しくなったからいうて、おふくろが土佐の高知へ。そこへ疎開したんです、おふくろの里へ。疎開して十日以上してからかね、広島に原爆が落ちたんですわ。
 Y：はいはい。
 B：でまあ、義理の姉さんは広島におったから亡くなったけどね。んでぼくがそのとき疎開したのは、兄貴がおってぼくがおって、妹がおったんです。でおふくろと親父と5人でおふくろの里へ疎開したんです。土佐の高知、阪神がよう野球やるところです。
 Y：はい。
 B：あそこがうちのふるさとです。それで親父が山を買って、山を開墾したんですわ。開墾してたら、昔住んでいた人もおったみたいですよ。
 Y：はい。
 B：昔の刀とか、折れたのとか出てきたんです。
 Y：ほおー。
 B：山でも四国で一番高いところですよ。そこに行くまでに、

お寺が2軒あったんですわ。お寺は誰もおれへん、も一軒も誰も住んでへん。道はひとりしか、並んで通れるような道はいつでもあれへん。そこへ行って開墾して畑をつくって、木もいっぱいあるから炭焼きして、備長のね樫の木で、できるもんいうたらね。ちょうど畑がうちの山買うときやったら5町くらいかね。昔のまま、お茶畑みたいな岸にずーっと生えとったわけですよ。で、池もあったんで。家は無かったんですけど、家を建てて。家を建てるのも、こう、杉の木がいっぱい生えてまっしやる、それを切って家を建てて。
 Y：その山に、以前に人が住んでたというのは。
 B：もっと昔。昔の話。
 Y：それこそ江戸時代とか。
 B：大正、明治の前やと思うわ。そやから。
 Y：そこに住まいになったときには、まわりには人は誰もおらんかったんですか。
 B：10軒ほどね、ありました。
 Y：多少はありましたか。
 B：あったけど、みな新しいようにしてました。
 Y：はあ。
 B：隣いうたらこっから、そやね、そこにほれ、その市場あるやん。
 A：うーん、どこですか。
 B：え、ま、こっから隣の家行こうと思うたら、八幡の役所の、八幡高校くらいまで行かな隣あれへんやん。両隣。
 Y：あー、うん。
 B：おーい言うても聞こえへんやん、ね。そっからね10軒ほどあったんですわ、山奥に。隣近所いうたら物言えるけど、隣行こうと思ったらそんだけ行かな。そしたらもう、ぼくら小学校1年のとき。
 Y：小学校ですね。
 B：2年かな。おじいさんそこにおったから、2年から、ね、その山に来て町まで通ってたんです。2時間片道、山二つ越えなあかん。片道2時間と言うことは、
 Y：10キロ。
 B：片道ね。それをずっと小学校通ってました。ぼくより小さい子もおるわけや、上の大きいのもおったけど。だんだん、おる間にぼくが上の方になってもうて、また小っちゃい子を山越えて連れてかなあかん。その山10キロ歩いて、学校まで歩いて行ったら、もう1

時間 2 時間、授業が始まってるわけや。

Y: なるほど。うん。

B: ね。その村から行くいうたら 4, 5 人や、学校行く子は。また途中で村もあったらしいね。あっても、5, 6 軒あったかな。その村の人も行きよったから、ぼくとこの村は遠いからね、みんなにいじめられてん。あそこね、うちは“とおない”いうてね、住所やったんよ。遠ないのに、“とおない”。

芦田: とおないのに。

Y: ははは。

B: “とおない”のに、いつも遅れてくる。

A: あ、遠ないのに

B: そんで、先生はそのときに、校長先生入れて 3 人しかおれへん。

Y: 生徒は何人いるんですか。

B: 生徒は 80 人くらいおったかね。1 年 2 年は先生教えて。2 年 3 年、3 人しかおれへんから、6 年まで 3 人でいけるわね。あともう一人小使いさんみたいな人がおって。先生に「先生、いつもおしてくるのはな、ぼく一人やったら遅れてけえへんねん、ちっちゃい子もおる」って。途中で空腹いたとかしんどいとか、しんどいから休んで行かな。そらしんどいわ、大人でもしんどいのに。ほなもう、手えつないで歩ける道ちやうもん。藁を持って、藁草履はいて行く道やから。もう靴みたいなある時分やあらへん。

Y: そうですね。

B: ほんでこんな、こう風呂敷を巻いてね、鞆をかけるかして、しかなかった。今みたいなリュックなんかあらへん。ほれで先生に言うてん。「うちの村へ遠足に来てくれ」と。

Y: ああ、なるほど。

B: いっぺんな、どっから来てるかとか、だれも知らへんと。んで先生と校長先生に言うたら、そんならこんどの PTA かな、父兄にきいて、遠足行ってみようかと。ちょうど蕨が生える頃やね、ちょっと春かな。そんでみんな、100 人近くかな、小っちゃい子がおるから父兄も来るやんか、大人な。んで水は上の方行ったらあれへんから、水なんかは何かいれるもんがあったら、いれて持ってかな。そりゃ谷まで行ったら水はあるけど、上は、山の上あがりゃ水あれへん。洗濯だの風呂だの雨水を貯めてある。こんな大きい、あっちこちに。飲み水は山からぐーっと降りて、担いでね。

Y: 汲みに行った。

B: そう。そんな苦労しましたよ、その山におるときは。中学校に入ってから、町に出った。

Y: そうなんですか。

B: そう。お父さんな、もうこんな山な、もう、なんぼでもええやん、売って町に行こうよって。おふくろがねもうそのときね、その山で具合が悪うなって、こんなこというても分からんかも分からんけど、犬神が憑いたんです。きつね、たぬき、へびも憑いた。つきもんが憑いたんです。あんにたぬきが憑いてるみたいに。そういうのが村のあれで、憑いたわけよ。うちは悪いことしてへんよ。それでぼくはお祈りをいろんなことを覚えて、お寺さん行って勉強して、学校のとき、お

かあさんのつきもん落とすのに。んでお坊さんに言うたら、つきもんが憑いてるからこういうものを煎じて飲ませとか、いろんなもの教えてもらった。犬神が憑いたらね、寝とつてもよう歩かんで、ぴょんぴょんってはねてくるんよ。おっかん。

A: へええ。

B: うん、おれが座らして、拝むやろ。出てけ！言うて、出て行くねん。よう歩かんのにば一っと、憑いたとき。そんなん嘘やろと言ってみんな言うけど、違うよ嘘やないよ。ぼくはもうそれを経験してるから。それからもう、お祈りを、小学校の時ですよ、お祈りを覚えて、空で、あんなん難しいやんか。先生に、坊さんにうやうやしく…ってな、それを覚えてな。拝むのはなんでも拝んどった。助けなあかんから、おかさんを。それでも中学校の時は、おかさんを町の病院に入れたわけですわ。四国の病院あっちこち行っただです。子宮ガンなとつたから、四国の大きい病院何軒も行ったんですわ。そのとき子宮ガンなんか手術できへんから。

Y: それで、つきものは。

B: つきものはもうとれてもうてね。

Y: とれた。

B: それで、誰が憑いてるのかはぼくでもわかったで、どこの人が憑いてるか。うちはねべつに貧乏してなかった。その村で一番裕福やったんよ。親父が畳やとつて、町に出て行って畳やとつた。だからお金とか、食べることもそう、昔やったらそういう食べ物とかくれるやんか。百姓とか、これ持って帰りいうてな。うちの親父は体が大っきかったから、昔の背負子いうてあるやんか、あんなの 100 キロくらいおんぶして山上がってくるぐらいの人や、うちの親父は。そやから町出てどっかの村に、畳裏返しに行ったりしたら一日やないもん。うちもして〜うちも！いうて。そんなん 1 週間 2 週間帰ってけえへんわけや。その間はぼくがうちのこと全部してた。

Y: ご兄弟は。

B: 兄貴と、ぼくと、妹と、弟と、一番下の弟は肺炎で死んだんやけど、ちっちゃいころにね。おふくろがまだおる時にね。んで、あとみな町に出てきたんですわ。それで中学校 1 年の時に室戸台風があったんですわ。おふくろがね、中学校 1 年…のときかな、亡くなって、こんど初盆やっというてたときに室戸台風が来て、兄貴と、海の近所やから安芸のね、海の近所で材木がいっぱい流れてくるわけよ、それをとりに行こういうて、浜見たら人がいっぱいやねん、漁師町やから。それで行って、2 階建てくらいの波に飲まれたわけや、ぼくと兄貴と。

Y: ほおお。

B: で、いっぺん上まで上がってきたんやけど、ぼくは助かって、兄貴は三日目に桂浜の近所に上がってきてはったんです。

それで、うちのおふくろの兄貴が警察に行っったから、豚の死骸が上がってるいうて、初め見たときそう聞いたんやけど人間やっというて。うちの兄貴やと思いうて警察のおっちゃんに言うたら、わし行ってくるいうて。その時分車なんかあれへんやんか、警察しか。

そのおっちゃんも、警察では車のすごう上手やから、行ってきて、そならやっぱりそうやった。んで連れて帰ってきたら、家に帰ってきたら、血が出てたんや。車の中で一切血出さなんで、下ろしてから血が出たんや。おふくろの初盆やけど、そのときに死んでおれは助かったんや。なんでおれは助かったんやと。死ぬ前におふくろはこう言いよってん、ぼくに。一生護ってやるいうて。焼き場いうたら田舎のことやから薪でこう、焼かなあかんねやんか。一晚中おじさんがこう焼いてたわ。今みたいな電気なんかあれへんやん。んで明るる年に兄貴が流されて死んだわけや。そんでそのときやから、おじさんが警察行つとったから、なんていうかな、警察が一番運転が上手くてね、

Y: ほおー。

B: 昭和天皇の、四国一周行つたて言うやつや、28年かね。四国一周するときうちのおっちゃんが運転して四国一周したていうわけや。んで天皇陛下の運転手が横に乗って、四国なんか今みたいなええのやなくて、砂利ばっかしや。リヤカーが通るような道や。バスなんか走ってへんやん、ね。下見たら崖ばっかしや。それでうちのおっちゃんが選ばれて四国一周して、昭和天皇を。それで勲章もらって。まあ、おっちゃんももう亡くなっておらんけどね。そのときぼくはちょうど、安芸いうとこ通るから橋の角っこで立とった。みんな座ってねお辞儀しとったわ。それで、おれの目の前でおっちゃんが車停めてくれた。そんなら、天皇陛下と握手して、おれは中学1年生のときで、まあ小っちゃいやん、今も小っちゃいけど。ほんで握手してくれた。おっちゃんが言うたんやろな。窓開けて、ぼくは立とるからお辞儀した。んで向こうから天皇陛下が窓開けて手だしてきよった。ほんだら近所に座ってる大人いっぱいおるやんか、なんであんたはいうて、びっくりしたわけ。

Y: そらそうでしょうなあ。

B: あ、運転してるのはうちのおじさんですいうたら、へえーいうて。

H: そのころは、もう敗戦の混乱はだいぶ治まった頃ですか。もうどっちかっていうと元気になり始めた時代ですか。

B: そうそう。うんまあ食べるもんは、もうぼくが中学校卒業するまでは苦しかったけどね。

Y: 昭和天皇が全国を巡行していた。

B: そうそう。四国いうたらもう山で、道はあるんやけど、下見たら崖ばかり。その時分車運転する人なんかほとんどおれへん。

Y: そらそうですね。

B: うちの人も車運転しとったから、ぼくが町に出てきたら、途中までサイドカーいうて横に乗るやつ、あの横乗せて、山まで帰らなあかんからいうて。町に買いもんに来たらおっちゃんが、行けるとこまで行つたわーいうて。

Y: それで、中学校まで安芸にいらっしやった。

B: そうですね。中学校卒業してから、まだ妹や弟はおったんやけど、ぼくは大阪へ出てきたんや。親父の家の跡継ぎをしようと思たんやけど、畳なんか重たいでし

よう。

Y: ふふふ。

B: ね、もう裏返しいうたら、うちの親父は手早かったけど、おれには畳はもう。こんな重たいもん持って、縫うのもでけへんわ。なんかこう、町をぶらぶらしとつたら、こういう、今みたいなんに飾って、なんかいろいろあるやん、こういう食べる仕事したいなっと思つて。

Y: うんうん。

B: それで、食べることはご飯炊いたりいうのは小さい時分からやってるから。

Y: あ、そうですね。

B: 親父に言うたんや。食べることの仕事をしたいと言うたら、大阪の方にこっから行ってる人がおつて、嫁さんがね、道頓堀いうとこでやってるいうから。そしたらおれ道頓堀も知らんし、んで高知から船に乗って天保山と言うとこまで着いて、迎えに行くからって、昔の電報や、電報でね。

Y: うんうん。

A: ううん、すごいな。

B: そんでそこまで迎えに行くから言うて返事して、そんで親父に言うて、道頓堀に行つたんですわ。で、天保山まで迎えに来てくれました。相手の人がね。

Y: そうですね。

B: 板場さんが、ぼくは料理がしたかったから、板場さんが二人と奥さんと。で、ぼくは天保山降りたときに、一番先に降りたわけよ。ね、あの、こどもみたいな、まあこどもやろわなあ。

H: 船で行かれたんですか。

B: うん船で高知から。そのとき親から1000円もらって、そいで天保山まで着いたら600円おつりあつたんや。

Y: ああ、そうですね。

B: その時分ね。んで、迎えに来てて、名前言うて、ぼく風呂敷包みふたつくくって担いで、そんだけしか持つてへんやんか。着替えゆうほど。

A: うん。

B: それで、あのとき靴はいとつたかな、中学入るまで靴履いたことなかった。自分でわら草履つくって履いた。おじいさんが教えてくれた、自分の履くやつは自分で作れいうて。藁をたたいてね、草履つくって。一日一足は長い道歩いてたら切れたりするから、いつも一足は余分に持つて。途中で切れたやつは置いといて、また山道、誰も通れへん道やん。通ってる言うたら蛇くらいですわ。マムシとかね、山ウサギとか。

Y: ふふふ。

B: それからマムシはよくぼくはとりました。あれは体にええからいうてね。ぱつとっしぱつかんで、ぱつと裂いて、骨だけにするんですわ。んで竹でぱつぱつ編んで、持つてくん。ほんでたまたま一升瓶をもつたとき、空で持つとってん。あのとき一升瓶しか入れもんが無かつたんです。そこへね、生きた奴を入れて持つて帰つて、あの焼酎かな、入れて、置いてあつたんですわ。そんでその焼酎が、傷薬とか、塗つたら治る薬になる聞いたから。飲めへんよ。

A: ええ、まあ。

B: そんなこともやってきたしねえ、山におるときは。そしたら道頓堀出てきて、その店で10年ほど修行しました。

H: どんなお店ですか。

B: 料理屋。

H: 料理屋で。

B: 料理とお寿司や。ぼくがおったときには板前さんが十人もおったんや。

Y: そうですかたくさんですね。大きなお店。

B: 一方で、ぼくがその店で一月働いて2000円ですわ給料が、ね。でその時分ぼくが一番小さかったから、鍋洗いやら、そんなことしかなかったんですわ。そのうち薪でご飯炊いたり、薪を割ったり、薪割るのん上手やなあ一とか、それはお手のもんや。

Y: それはお手の物。ははは。

B: んで、ぼくはなんか出来る一いうたら、ご飯炊くぐらいはできますよ一言うて。釜で、あのほれあの一かまどで炊いとったやろ。で、俺らも昔やからあんなもん木でしか飯炊いたことあれへん、ガスで炊いたことみたいなんあれへん。

Y: お店は薪で?

B: 薪で自分やってました。やとったけど、他の人もやとったけど、僕と代わってから、Bくんご飯炊くの上手やなど。

Y: ご飯がおいしい

B: うん。僕はもう、なー。勝手に言われへんやん。ご飯も炊けるし、いろんなもんも切ることできるしな。ご飯炊くのはどうやって炊くとかはもう小学校の時から知ってるから、こうじっとしとって見てこういう炊き方してんねん一と。米を洗ろうたらすぐに火をつけて炊きよるやろ、それはあかん。洗ろうてしばらく置いて、今日はどんだけいるかいうことを。で自分で洗ろうて、かごに入れてね。そこではね、出前が多かったからね。

Y: そうですか

B: 出前でようこんな担いで、道頓堀走とった。ほんで2年くらいしてからね。コニー360、車ができたしてから、車を買って運転できる人が1人おって、それで出前いったわけや。

Y: かなり広い範囲を出前しておられたんやね、車で。

B: うん。もう車でもうこっちから大阪まで行くくらいのことまで出前もやった。昔は自転車走とった大阪の道頓堀から、阿倍野からまだむこう北島っていうところあるんですわ。そこまでね一自転車で僕担いでいったんですわ。

Y: そうですか。

H: すごい。

B: まだまだちんちん電車が走とったからね。入ったらひっくり返されるような道や。ほんで阿倍野もぶあーとあがる坂や。これはもうしんどい。こっちから行ける道無いかなくて、それで探して行ったらあがらんでも良い、ちょっと速回りなるけど、北島いうところまでいったんですわ。ほんならその時分、そこはね弁当でもなんか知らん4つか5つ、いつも持って行とったんですわ。

Y: へえーそうですか。

B: みんな自転車乗りますよ、そこへ行くの嫌がるねん、遠いから。ほんで誰もいけへんから僕がいったんですわ。

Y: 個人のお家にご飯を届けるわけですな弁当を。

B: その家はね、本町でね特許事務所、鎌田特許いうてね、今でもやってます。

Y: 角にありましたね。

B: 角っこにあります。その本宅が北島です。そこにいとさん、こいさん、なかつちゃんが、三人娘がおったわけや。で、御寮さん、もうたいがい五つか六つか弁当持っていつとった、弁当か色んなもんね。お寿司ならお寿司とか。出汁はこんなポットに入れてここへ引っかけて。

Y: それは昼のご飯ですか夜のご飯ですか?

B: 夜のご飯。そんなもん昼ご飯やったら行くだけで時間かかりますわ。ほんでその御寮さんが、行ったらご苦労さん言うて紙に包んでくれてあれ、なんぼか、100円か200円くらい。「僕これ、ご苦労さん」言うて。初めて行ったときな、帰ってきて奥さんになこうやって、「もらったんやけど、100円札やった」って。奥さんは「それはBくんが持ってったんやからBくんのもんやから、持ときなさい」って。ほんで車でいくようになってからはあれやけど、初めのうちはずっと僕が行とったんですわ。

Y: そのころのお住まいは、どんなところにお住みやったんですか?

B: その時はその店の三階が、みな、あの、上の人は通ってる人が何人かおったけど、あとは皆住み込み、ね。で住み込みで僕はもう朝早く起きて、あの、なんやかんや段取りして。で、出前昨日行ってまっしゃろ、器を下げに行くわけや。あっちこっちへ。それだけでも大変や。

Y: 晩ご飯だったら次の朝に行くんですか?

B: うん朝。夜よその家へ持って行ってほんで朝、器下げにいくわけですわ。

A: じゃあ十人くらい板前さんおったときはそのくらいの人数で住んでたってことですか?

B: そやから上が、そうやね、6人か7人くらいで三階で住んでた。三階建てやったからね。二階は奥さんやとかおやっさんとか子どもがおったからね。三階の横から、あの集団就職に来たんが2,3人おってね、一日だけやって夜逃げしよった子が、広島から来た子がね、鞆を下に落として。丁度その横に電信柱があって、電信柱で「何してんねん」って。僕に言うとったよ、「こういうのにむかん」って。帰る金はもととったんやろな、ほんで広島帰って。

Y: 仕事は厳しかったんですか?

B: そら厳しかったです。「こんな洗い方しやがって!」っていうようなもんや、上の人は。出刃でも飛んでくるくらいや、ね。そらもう蹴飛ばしたり、流しの上に、流し色んな汚れた鍋とか色々置いとるわけやろ「誰やこれ洗ったんは一」って聞かれるわけや。そんな聞いてたから、僕も文句言われるん嫌やからもうきっちりしとった。器でももうこの上置いとったら怒られる

わ。もうきっちり、きれいに洗って、湯通しして、拭いて、で棚に置く。まあいうたら消毒みたいなもんやね。洗うて拭くと違って、塗りもんなんかやったら二度拭きしなあかんやん。今みたいなあんな塗りもんと違って漆塗りばっかしやから、ね。あれ洗って、水で洗って、湯通しして、拭いて、もう一回きれいなあれで拭いて、箱に10個ずつ入れるわけや。そんなんやった。

Y: そこで何年くらい修行しはった?

B: そこで十年。十年修行して僕は18の時にね、あるとこの出前いって、そこの奥さんやおじいちゃんに可愛いがってもらって。そこの家に養子にいったんですわ。

Y: そうですね。

B: 料理旅館やったんやけどね。ほんでこいさんが1人おったんですわ。僕はけんじやから、けんちゃんけんちゃん言われとったから。休みの折は月に2回しかなかったんやけどね、「休みの日は家に来たらええよ」って。「ご飯も何でも食べさしたるから。お金もいらんから」って。映画の券くれたりね、小遣いくれたりね、で休む度に。犬も飼うとったからそこはね、女中さんと仲居さんが10人程おった。ほんでいつもいったら可愛いがってくれてね。休みにになったらお使い行ったり犬の散歩したりね、やとった。俺は昔は山で犬も飼うとったし、何でも飼うとったんや、牛も飼うとった。そういう経験があるから「Bくんは器用やな」言うてね。で、女中さんやとかも随分厳しかったよ。こういう襖おまっしゃろ、あの障子紙。「ここ誰が掃除した? 掃除してへんやないか」って。そこまで調べよったんやで昔は。100人ほど泊まりに来る平屋で。ほんでそこへね僕は18の時に養子に行ったんですわ。こいちゃんが僕とやったらええ言うて。ほんで10年辛抱しとったところは近所やから、道頓堀渡ったとこやから。

Y: ああ近くなんですね。

B: うん。だからそっから通とったわけですわ。たまたま家の嫁さん文楽出とったから、喜劇俳優やとか皆知ってますわ。松竹系やったからね。松竹座も出とったし、色々あっちこちいってました。京都の南座やとか、コマ劇場やとか。大阪にも梅田にコマ劇場いうのおまっしゃろ、東京にもあるし。ああいうとこ出とった。藤山寛美なんかもううちの嫁さんよりも下やったもん。踊りはもう五本の指に入とった。家行ったらもうその時分テレビもあったしね、お琴から三味線からもうみなあったわけや。嫁はんが全部やってたから。チコンキ(蓄音器)はいっぱいあってね、あの時分。そやから僕はいつも歩いてそこへ行って、チコンキいうたら昔の浪花節いうのがようはやった時分おまっしゃろ。そうやってね休みにになったらそこへ行って、もうなんや自分の家みたいな感じでね、ようかわいがってもらった。その代わり僕はもう一生懸命できる範囲はね、やらしてもらった。それからあの、芸能人が大阪の歌舞伎座とかきたらみんな家へ泊まってきた。

Y: ああそうですね。

B: たいがいの人は。ほんでそこでおって、あれはいつかな一、こいさんが体悪くして、子どもができへん体や

からな。「けんちゃんええ人がおったら、嫁さんもらったらええよ」って言うてくれたんや、お母さんがむこうの。「孫も欲しかったんやけど、子どもができへんからけんちゃんに悪いしな一」って。ぼくが25かな、まだ一緒におったから。25過ぎてからかな今の嫁さんと一緒になったんです。

Y: そうですね。

B: で、初めての子どもができた時、宮参りから全部そこのお母さんが全部してくれたんや。

一同: ほ一。

B: 前のこいちゃんも来てくれたり、おじいちゃんもおばあちゃんもおった時分やから、いっぱいようけ来てくれたんですわ。

A: 25歳ってことはちょうど店、修行10年終わった時なんですわ。その店の次はどこで自分で・・・

B: それからね、初め子どもできた時はね、結婚したときには住吉に住んどったんです。

Y: 住吉?

B: うん住吉。荻田町ってとこにね。荻田ってまだ我孫子までしか地下鉄がない時分ですわ、ね。今はず一とあるけど。ほんで住吉大社へ行って、一番上の子どもが宮参りして、ほんで宮参りのあれから全部前のお母さんがしてくれて。そこでしばらくおって、ほんでそれから、子どもできてから大正区で。あの一みんな妹や弟が、親父も大阪へ皆出てきたわけや。

Y: う一、四国から。

B: うん四国から。その時分養子に行ったからお金も送ったり、もう色々やとったからね。僕の給料以上に送とったから。その代わり僕の給料は貯金しとった、その時分。何かあったらあかんと思ってね。ほんで親父が来たから大正区の市岡いうとこでね家借りて、弟と妹が住んどったんやけど、妹がもう中学校卒業してからかな、僕が養子に行ったとこへ、女中さんできたんや。

Y: ああ一働きに来た。

B: うん働いて。弟は親父の跡を継がんと、鉄骨のこういう樋を作とったわけや、仕事はね。親父は大阪へ来てても畳をやとった。

Y: 畳屋さんと鋳掛屋さん。

B: う一。ほんで暫くしてみんな大っきくなってね。今も弟は大正区におる。

Y: そうですね。

B: 親父はもう早う死んだけどね。夫婦でもう孫もおるし。

Y: その頃はもうお店を開いておられたんですか?

B: 僕がその時は養子に行とった時やから。

Y: ああそっちで、そっちの厨房。

B: うん。ほんで別れてからは、25、別れてからは職人で、道頓堀で旅館やとった人が香里園で商売するんで、Bさん家の店来てくれへんか一? 家もちゃんとあてがう、家賃も取れへんし言うて、香里園で一番先働いたわけや。

Y: そうですね。それで京阪沿線に近づいて。

B: ほんで香里園のちょうどあの成田不動さんの北の方に。そこの奥さんも大きい土地持って、隣が風呂屋やった。そこで僕に、そこお好み焼きするから、お寿司もする

いうて、「お寿司やってくれへんか」って、僕お寿司や
って。そこも出前ばっかしやったから、店も入ったけ
ど出前も、あっちこち出前行ったんですわ。作っては
自分で出前に行って。ほんでそこでも流行って、「もう
あの B さんいう人がおったらこらで寿司屋できへん
わー」いうくらい流行ったんや。ほんでその奥
さんが休みになったら、旅行やなんやかんやとこう連
れて行ってくれたわ、あっちこちね。ほんで、家賃、
家は 2 階建ての家借りてくれて、ほんでそんな時、香里
園で真ん中の娘ができたんや、ね。それから暫くして
から、えーとどこやったかなー、香里園から友達が
大阪の、あの一国際ホテルに料理長でいってったわけよ。
僕は味付けが上手やったから、煮方いうてね、料理人
で煮方いうたらもう味付けばっかし、なんでも味付け。
そんな時に煮方やとったから、料理長の次が煮方や、
偉いのが。ほんでむこう行ったら盛りつけ、むこう行
ったら魚捌くやろ、で盛りつけたんもこうやって盛り
つけする。でそういうのが結構あったから。「あの一
国際ホテル来てくれへんかー」って。「給料もちゃんと出
すから」言うて国際ホテル行って。ほんで国際ホテル
にしばらくあったから、俺らも芸能人みたいがい知
ってるわ。よう芸能人が歌を歌いに来たりね、芝居しに
来たり。サインも持ってる。山田五十鈴やとか、あ
いう人らが国際ホテルで泊まったり、藤田まことやと
か、藤田まことは前座やとったんや。あの人、歌上手
い、ものまねやとったから、大阪で。その時から僕、
藤田まことと白木みのるとそれからダイマールラケット
といとしこいしやとかもうよう飲んだんや。そら道頓
堀では西川きよしも学生の時分、吉本に入れたった、
ね。嫁はんが文楽出とったんやけど、俺がいつも弁当
昼持っていってたんや。「にいちゃんいつも学生服着て
何してんのー」、どこの弟子なりたい言うて。ほんなら
東京から目玉の大きい人が文楽来とったんや、その人
の弟子なりたい言うて。「ほな聞いてみたるわー」って
言うて、その人わし全然知つたらんから、家の嫁はん
が「どっからきたんやー」て。「市岡からや」、「国はど
こや」、「四国や」、「四国かー！俺も四国や」って言う
て。ほんで話が合うて、家の嫁はんに言うたら、暫く
ここへ来たらええわ言うて。学校も卒業したあれやから。
ほんで家の嫁さんも弁当食わしとったんや。自分
はよそからとって、俺が持ってたやつ弁当箱きれいに
洗って。家で弁当なんか洗ったことないのに、ほんで
あの子に全部食わしとったんや、西川きよしに。ほん
で嫁はんが吉本入れたったんや。ほんで吉本入れたら、
ええやんか一言うて、俺は吉本見にいったんや。もう
どこへ入るのも俺はタダや、ね。ほんなら西川きよし
初めて舞台出て、「目玉が落ちるー」って通るだけや。
その時分、ヘレンは看板スターやったんや。ほんでし
ばらくしてから漫オブームになってね、売れたわけや。
そやから吉本の人間は殆ど僕のこと知ってる、古い子
は。こないだ写真みせたったやろ？

A：あー見ましたね。

B：ね。今も持ってるよ。そら三枝なんかも友達やもんな。
三枝のあの親方の家へ俺はよう弁当持っていってった
から。三枝がおったんや、弟子で。ちようどね道頓堀

のね、今アメリカ村ってなってるやんか、あの辺に家
があったんよ、三枝の親方の。

Y：そうですか。

B：桂文枝か、文枝やったかな。いつも俺、弁当持って行
とった。晩なったらかにすき持って行ったりね。そ
らもうあっちこち行くから、「なんで B くん芸能人よ
う知ってるの？」って。「そらもう家に芸能人もよう泊
まっとたんや。たいがい泊まってるで大阪へ来た人は」
言うて。もうそやから、今のあほの坂田とも飲んだし、
おおぐち言うとったんや昔、ね。おおぐちはもう芝居
やめて店やとったんや。今もやってるん、娘がやっ
てるんかな。そこであの坂田、あほの坂田はそこにお
ったんよ、ほんであれと漫才を組んだわけや。えーと、
ふじ、ふじ・・・。

A：わかんないです。

B：俺もう年いったから、忘れてまうわ。

H：前田五郎。

B：前田五郎！前田五郎と漫才組んだわけや。ほんで組
んでまだ売れてへん時ね、前田五郎と暮しまった後ね、
よくこれ。

H：ほっほー。すごい写真ですね。

B：三枝もいてまっしやろ。仁鶴もいてまっしやろ。き
よしもおるやろ。

H：岡八郎もおる。

B：うん岡八郎もおる、死んだけどね。

H：これ場所はどこなんですか

B：これね映画に出たんですわ。あの太秦で、その時の写
真です。

H：みんなだから 20 代くらいやね。めちゃくちゃ若い。5
0 年前？

B：50 年。

H：ほー貴重な写真ですね。

B：あの太秦のね。ぼくも太秦に住んどったんや、三番目
の女の子ができた時。この時分から三枝はもうよう知
ってますねん。仁鶴やとか。ほんなら島倉千代子が三
十か二十歳のときから僕知ってます。

Y：(笑)

B：僕、けんちゃんって書いてますやろ、二十歳の誕生日
になったらね、心齋橋のそごう百貨店の 6 階で誕生パ
ーティやってね、うちに泊とったからね。

Y：あーなるほど。

B：んで、「ケンちゃんへ」言うて、呼んでくれたんよ。僕
はまだ 18 の時だったんよ。二十歳やろ島倉千代子。

H：これは僕の生まれた年や、1958 年。

B：この間死んだけどね。んで大阪に来たらいつも弁当持
って行とったんよ、楽屋へ。大劇いうたらエレベ
ーターなんてあれへんやん、昔は。今は…。3 階まで
いつもおんぶしてな。弁当持って行ったら終わるやんか、
昼ご飯食べよるとき。じっと幕間から見とって舞台の
端から端まで走り回るやんか、歌に乗って。それがし
んどいんですよ。で、3 階まであがるのがまたしんど
い言うて、ようおんぶしたったわ。

Y：あーそうですか。

H：30 ちょっと位までにもうどんだけの人生を生きてこ
られてるかという。

B: ほんで国際ホテルおったとき、今の天皇陛下の息子か、皇太子。あれの料理したときな、皇太子が僕に菊の入ったタバコをくれてん。皇太子になる前、浩宮の時やわ。そのとき国際ホテルに泊ってん、一人で。付き添い3人ほどおったんや、その料理を出したんや。付き添いがまたうるさいんよ、毒味なんかいろいろなで。

Y: (笑)

B: ね。ほんで骨のあるもんはあかんいうて。でまあ、ちゃんとして出したら喜んでくれて、ぼくに5カートンくれた、タバコを、菊の紋の入った。ほんで美味しかったいうて。そらもう調理場まで見にくるんで、その付き添いが。

H: そのとき皇太子様はおいくつだったんですか。子供ですか。

B: いや。まだ、あの。今は皇太子やろ。

H: はい。

B: 浩宮の時やから。

H: 浩宮の時。

B: そう。今は皇太子。

H: そうか、今は皇太子か。

B: まだ嫁さん貰わん時やから。

Y: なるほど、それで一人で。

B: そのとき会った、皇太子。皇太子の浩宮様と会って、握手してもろうた。

H: 国際ホテルの頃はどこに住んでいらしたんですか。

B: その時は、香里園。

H: 香里園ね。

B: 香里園か、

H: 両方やってるみたいなですね。

B: うん。

Y: ほんで香里園の次はさっき太秦とおっしゃったけど、また…。

B: 京都へ行ったんですよ。

Y: 京都へ。

B: 京都の太秦の方へ行って、北大路新町いう所へ開店した店に行ったんですよ。活け造りしたり、なんやかんや。そこで1年か2年おったかな。そのとき1番下の娘が出来て、ほんで、京都のあの、なんちゅうお寺や、もうど忘れしたけど。そこにお宮参りして。北大路新町へあがる角っこにね、芸人がやってる病院があるねん。嫁さんにいったら、東宝にえーっと、ど忘れした。もう亡くなったけどね、今でも病院はやってますわ。

Y: そうですか。その頃はお年は40前後ですよな。

B: 40前後、ええ。もう京都でも京都中の社長よう来たで、うちの店へ。活け造りやってる店1軒もなかったから。今でこそやってるけど。もう僕は活きたやつおろしてね、ぱっと船に乗せて。まあ京都中の社長連中、出雲屋とかあんなとこの料理屋の社長も来てくれたしね。そらもう、それも市場、中央市場からの、そんな社長も来てくれたわ。そやからもう芸人からの予約がけっこうあって、祇園の舞子はん芸子はん連れてきてくれて。それからやめて、また国際ホテル帰って、また今度、買った人からまた帰ってきてくれへんかて。で、帰ってやって。それからもうしばらくして今度は

商工会議所へ来てくれへんか、いうてまた…

Y: 商工会議所ね。

B: 大阪の。

Y: 国際ホテルが元々その横にあったのですね。

B: 横にあって、国際ホテルがやめてから商工会議所へ。

Y: そうですか。

B: で、国際ホテルおったら、洋食部門と和食があった訳ですわ。和食の方に僕が行ったんですわ。そんならもう、従業員だけでも100人くらいおるわけよ。その昼飯も作らなあかん。

Y: うーん。

B: ね、食べにくるやんか。それからもう、商工会言うたらパーティが多い。まあ今日は100人200人いうてパーティ。1000人ほど入る店やったから。そこへ行ったとき、あの、長嶋も来てくれたしな。長嶋の監督と3人で僕飲んだことあるわ、そこでも芸能人。橋下知事るとき知事も来てくれた。それもパーティに来てくれて、握手して。んで、阪神に入ったあれ、この間優勝しましたやろ、星野監督。阪神へ入る前にうちでパーティしてた訳ですわ。で今度阪神の監督になるんで、阪神を今年優勝させますいうて啖呵きりよった。僕も阪神あれやから握手して、頼みますいうて、その年に優勝したんや。

Y: んー。

B: ね。ほんで僕はもう阪神の野球場の近所に、鳴尾に住んどったからね、前の嫁はん。あの辺は詳しいですから。

Y: そう。鳴尾にも住んでいらっしやった。

B: 前の嫁はん。あのほれ、家はあったんやけど結婚した当時、おかんが家買ってくれて。おじいちゃんおばあちゃんもね、それのおじいちゃんおばあちゃんも鳴尾におったからね。

Y: そうか、うんうん。

B: ほんで鳴尾から通ういうたら、もう道頓堀まで通うゆうたら、朝早いし、こっち泊ったり、で嫁はんは東京行ったり、ほれ1ヶ月ほど帰ってけへんやんか。そういう時はもうおかんのところ行って泊って、ね、店が近いから。道頓堀やから、家の近所やから。そうやってやとったんですわ。で、前のおかんも亡くなって、こいさんが一人になって女中さん連れて阿倍野の方に5000万の家買って住んどった訳や。んで、その土地も全部売って、どこ行ったんやろなこいさんは。で隣のタバコ屋やとったおばあちゃんがけんちゃんやったら教えるわ、誰にも教えんといわれてるけど、あんたやったら教えるわいうて電話番号教えてもらって、電話したら前の嫁はんが出て、どこに住んでるのっていうて、阿倍野警察のちょっと入ったとこやいうて。俺も阿倍野に住んでんねん、近鉄の手前にあの、えっと今もあるけど、そこで仕事してんねやいうたら、ああそう、ほな食べに行くわいうて。まあそんときね杖突いてきよったわけですよ。

Y: そうですか。うんうん。

B: ね。で、4階はもう食べもん屋ばっかし、そこで僕料理やとったから。寿司も和食も。70人くらい入る店で、そこでやってて、そのこいさんが女中さん連れ

と一緒に食べに来てくれたんやけど。ほんならいつも2, 3千円しか食べへんのに1万円札出して、おつりケンちゃんに渡しといてやっていうて。来るたんびにくれるわけよ。ほんならその奥さんが「あの人なんやの」いうて、来るたんびにおつり全部…。いや、まあもろたらおかしいけど、「いやあ前の嫁はんですわ」いうて、「ああそう」いうんで。これ持ったからね「こいちゃん、俺もうお金げっぶげっぶしてるから金あったらおくれ」いうたら、あくる日200万現金持ってきてくれて、それ貯金にとっとる。それからもうしばらくしてね、別の女の子やめさせて、前おった女中さんを俺知ってるからその人と会わせて、話したらよう知ってる子やん。で、その子に50万やって見たってくれと、洗濯しに行ったり、病院に行ったりしたってくれと。

H: それは割と最近の話ですか。

B: それは別れてからやからね。

H: あそうか、その話は。

Y: 阿倍野で働いておられたのは、国際ホテルの…

B: はい。国際ホテルの親方の店ですわ。

H: そうですか。

B: ほんで、商工会議所もその親方が…

Y: あ一同じ人ね。

B: ほんでチェーン店が10軒ほどあったんですわ。

Y: ふーん。

B: 僕はあっちこっち、廻ったんですわ。

Y: なるほど。

B: あともうちょっと、もうちょっと見たってくれへんか。ほな、天王寺でもそこにおったんやけど、もう食べるころばっかしやから、みな激しいわけや。あそこ流行ってないとか流行ってるとか、もういろいろあるわけよ。で、「B君いってくれんか」。でその職人はやめて、あれ若いし二人おったからそいつらにきっちり教えて、もう味付けから。そやからもうB君来たら客はもう座って待っとるもんね、満員で。んで近所の人もびっくりして。僕が行ってから近所の人食べに来はる。味見に来るわけですよ、色んなのを。

Y: (笑)

B: それからもう俺は近所へ、僕も食べに行った。ここはどんな味してるかいうの。ラーメン屋もありや、喫茶店もありや、立ち飲みもある。もう色んな。それでも来るから、もう1階2階3階はもうそういう色んな店が入っとる。そういう人らも来るからね。社長連中が。そやからそんなまずいもん出しとったらなあ。ほいから、やっぱりそこの社長、B君やっぱし、味違います、上手やねんなあいうて。

H: あの、料理のことよくわかりませんが、その素材はどうだったんですか。

B: 素材はもういるもんを、僕が電話で魚屋なら魚屋、八百屋なら八百屋、中央へ電話して持ってきてもろった。まあ、色んなメニューがおますやろ。まあ、お寿司やったらもう穴子からなにまで、ないもんないくらい揃えなあかん。やから僕はもう昔から味付けが上手だったのか、みな、寿司の酢も全部自分で合わしとったからね。

Y: 料理人の方々の世界いうたら、すごいつながりが多い訳でしょ。

H: 色んなつながりでどンドン広がってますけどちょっと話戻って、じゃあ一番最初に大阪に出てきて、道頓堀の最初お店に入れたのはどんなつて、というか…

B: それは高知で、安定所に頼んだから。

H: ああ。

B: 安定所、役所におじさんがおったから、高校で行きたいんやけど、大阪の方にあるんかなあいうて

H: 実際じゃあ縁とかじゃなくてももうほんとにだから飛び入りというか

B: たまたまね、そこが欲しいというてるから、いくかあいうて。

Y: でも、お知り合いやったわけでしょ。

B: お母さんとは知らなんだけど、その人の姉さんがたまたま、おじさんが来たとき来たわけよ。あらと思っ、顔を見たとき。ほら姉さんも嫁に出て…

Y: ええ。

B: 名字が違うやんか、ね。でB君、ここにおったんって、でまたその奥さんもびっくりして。そういうことがあったんですわ。ほんなら、道頓堀でやってたときに、まだ僕が小学校の時ね、習った先生が僕が自転車で器あげに行っったんかな。僕に聞きにきたんや。どこそこの、知りませんか。ぱっとみたら「いや、先生ちゃうの」って。それも偶然にね。

Y: (笑)

B: で、その先生の妹か姉さんか知らんけど、どこやらで働いてるいうから、その店やったらここやわいうて教えて。B君なんでここにおるのいうて。いや俺もう高知から出てきて、和食の店勤めてるんや住み込みで。もう、あのね、偶然いうのは怖いね。

Y: そうですなあ。

H: そういう、まあまだ団地の話にまでいってませんが…

Y, B: (笑)

H: そういう色んなことの中で、最初戦時中に高知の山で長い距離通学したり、自分で煮炊きしたりとか、その頃のことというのはその後の人生になんか関係してますか。

B: ある。

H: ありますか。

B: ええ。絶対ありますよ。

H: 全部自分でね。

Y: まあとりあえず薪割るのが上手やった。ご飯炊くことが上手やった。そんなことから始まって。

B: 中学校行っったときには畑作りますやろ。それ作るのは僕が1番上手やったん。んで、大根作っても、何でも人参作っても全部、出来たもんをリヤカー引っ張って街に売りに行くわけよ。んで、ぼくはもう街の一番先の病院に行っったんです。病院へ売りに。ほんならその看護婦さんが僕のこと知ったから。

Y: それはお母さんが入院されてたから。

B: うん。入院しとったから。全部買いうて。もう売れてきたんいうて。そんなときは黙ったんや。病院に持ったっていう。

Y: (笑)

H: すごいですね。
 B: 皆1軒ずつ、どうですかどうですかいうて。
 Y: やっぱ食べるものとのつながりってというのがどこかずっとあるみたいですか。
 B: で、もの作るの、俺もう野菜でも何でも作ってたから、そういうの、もう手入れたとかきちっと中学校のときに僕は、妹や弟や洗濯したりなんやかんや。休んだこともあったんよ。ほんなら家庭訪問に来たんよ先生が。俺がどっか行って遊んでるんちゃうとか。なら洗濯しとったよ俺。(笑)井戸水でね洗濯板でこうして。そしたら先生が来たからいうて、ぼっと、ものいわんと陰で見とったんよ。
 Y: なるほど。
 B: 洗濯したり、掃除したりやってるんやないいうて。おかんの代わりにやってるん、妹と弟を。親父は出て行ってやな、なかなか帰ってけえへん。ただ単に隣の村に行ったらなかなか帰ってけえへん。そんなんで妹や弟はまだ小っちゃいから、小学校やったからね。何もでけへん。その弁当作ったりなんやかんや。
 Y: 自分で生活をしていくということは、今そういうのはなくなりましたね。
 B: 今まで僕元気なときはね、家ではやってました。ところでね、1番だったと聞いております、おでんでも100個、帰ってきたら皮をむいていう具合で。家でやって、その市場で。
 Y: ああそうですか。
 B: 前、そこ市場やったんですよ。
 H: あの辺の時代からここに組み込まれた。
 Y: ここ、どうして男山にこられたんです。
 B: 男山に来たのはね、香里園でね、住んどったときに男山いうところが新聞かなにかに載ってって、で、抽選で当たる様になっただけよ。ほんでも僕も香里園をどっかに行かないかんや、そう京都に行かないかんから。
 Y: はいはい。
 B: どうしようと思ってここに、当たるか当たらんかわからんけど、で、当たったわ。
 Y: なるほど。
 H: こちらの方が近いですよ、京都に。
 Y: 京都でお仕事されたり、大阪でお仕事されたりね。
 B: 近いし、ほんで9階やいうて。エレベーターがついて。
 Y: あの高層のね。
 B: で、家賃が7万くらいやったかな。3ヶ月分を払えば入れるいうことで、それで。
 H: 何年くらいお住まいなんですか、この男山団地に。
 B: 出来てから。
 H: あ、出来てから。
 B: まだこれもなかったですね、僕来た時は。この道も。ポリボックスはもう小っちゃいポリボックスやった、派出所みたいなな。
 Y: この高層棟も低いところも一緒に出来てましたか。
 B: ええ。出来てました。来た当時は奥の方はまだやってた。
 Y: そうか、向こうから。

H: じゃあここに引っ越してこられてからもまだ、料理とかは現役でいろいろ教えてましたか。
 B: ええまあ。もう家に帰って寝たら倒れるまで、この向こうの養老院へね、僕もうやめてね、養老院。そこらの寿司屋も行ったし、名前忘れたけど、市ノ瀬に養老院ありますねん。こっからまっすぐ行ったところに、竹藪こえたところに今もありますわ、5階建ての。そこへ僕は料理しに行ったんですわ、みんなの為に。
 Y: ああ、そうですか。
 B: 100人くらいおる。そこで泊ってる人達がね。
 Y: この近辺でもいろいろお仕事なさってたんですね。
 B: ええ、その寿司屋も行ったし、んで今もやってる、生け簀もやってるし。ほんである人がB君、養老院に料理しに来てくれへんかいうて、行ってん。なら、その社長が養老院、大阪でもやってる。大阪城の近所でもやってる社長やったんや。で、僕、こっからやったら歩いてでも自転車でも近いやんか、たいがい。朝6時くらいには行っただ、店に。
 Y: ふーん。
 B: ならもう8時頃には食べにくるやんか。
 Y: ああなるほど、その頃にはね。
 B: 朝やったら、パンと牛乳やとかそれですむけど、昼もせなあかん、晩もせなあかん。んで僕いつも早う行って、その看護婦に「Bさん早う来てやってんねんなあ」いうて。早うせんと間に合えへんて。ほな仕入れすんのも、骨のないもんばっかしせなあかん。肉みたいな固いもん食われへんし、で柔らかいもんばっかで考えなあかんし。で、昼は昼でおじやもせなあかん。お粥さんもせなあかん。普通のご飯食べる人もおる。そんなんもせなあかんやん、毎日。もう牛乳は、僕は冷たいのがええ、あたしは温いのがええいう人もおるし。みそ汁は嫌いやけどすまは好きやとか、色んな人がおるわけよ、うん。そこで1年ほどおったかな、そこで倒れたんですわ。
 Y: そうですか。
 B: ほいで救急車で運ばれて、救急車の人に来て、その枚方の厚生年金が1番ええ言われて、救急車の人がいよった訳ですわ。で、ほなそこに行きましよういうて、そこで3ヶ月入院しとって、こうやってぼちぼち歩けるようになったわけですわ。
 Y: ああそうですか。
 B: 早かった、手当が早かったから、あそこで3ヶ月目くらいにもう歩けるようになったんです、ぼちぼち。こういうのを持って、で、よかったです。あれもどっかこっち来とったらわからなかったかも知らんし。
 Y: それは何年ぐらい前ですか。
 B: 3年前。
 Y: 3年前ですか。
 B: そやからこっちの手はもう、今でもこうで、病院行ってます。今は脳外科行ったり耳鼻科行ったり、今あのリハビリも行ったり。
 Y: そうですか。
 B: 明日も病院に。
 Y: いちばん仕事をしてこられた手ですか、それは。
 B: そやから出刃なんか、包丁なんか使われへん。字も書

- かれへん、震えてもうて。そやから左で全部、スプーンとフォークで食べてます。
- Y:なるほど。
- B:で、ものは何でも食べれますけど、固いものはなかなか食べられん。まあいつも嫁はんがお粥さん炊いて、昼なら昼のおかずを置いて仕事に行ってます。
- Y:ああなるほどね。で、ここに移ってこられたときには奥さんとお嬢さん3人と、5人住まいだったんですか。
- B:はい。1番上の娘はみなここの学校。
- Y:ここの中に、団地の。
- B:ええ。あそこ全部小学校を卒業して。中学校も向こう卒業して。
- Y:ここで学校行かれて。
- B:はい。学校も近いと思って。
- Y:そうですね。
- B:僕はあっちこっち行ったけど、子供なんか家かわるたんびに学校かわったら可哀想やん。昔それがあったんやん、僕らの時は。
- Y:こっちに移ってこられた時は、お子さんはもう小学校ぐらい。
- B:まだ上の子が小学校やったかな。
- Y:ああそうですか。
- B:3つずつ違うから。だから僕はもう働き詰めで。
- Y:ここで大きくなられたんですね。
- B:今度孫がその学校に行きだす、その小学校の校長先生がそのときのうちの娘の先生やったんや。で娘もびっくりしとった。「あたしが習うた先生がな、今の校長先生や」ハハハ。
- Y:そうすると、お嬢さん達はどっかこの近所で所帯を持っておられるんですね。
- B:今二人はこの近所にいます。で一人は万博の近所におるそうですが。
- Y:そうですか。
- B:長い事ここにおったけどね。まあ、いろんな事あったけどもね、もう孫も大きくなって、ひ孫がいますわ。
- Y:そうですか。
- B:東京の方へ行って、いずれ帰ってくるかもしれんけど、ドン・キホーテ言うところに行ってます。
- Y:今、勤めていらっしゃる。
- B:孫、横浜の大学に行とって、大学4年卒業してからドン・キホーテ行って。まあ、ここへ来てもいろいろあったけどね、あったけどまあね、住めば都や。近所にしてもまあね、良くしてくれたし。
- H:でも前半世の料理旅館とか道頓堀とかの世界と、この団地の世界とだいぶ違いますね。
- B:そら違います。ただ僕も道頓堀におるときええ目してきた。ええ目もしてきたけど苦しい事もあった。まあこれもね、なかなか一軒の店でね10年も続くいうたらいってませんで。
- Y:ああそうですね、うん。
- B:料理人総上がりしたときも、僕一人なってもがんばった。総上がりってわかります？皆、辞めてまうの。僕一人なってやった。それからまた料理人入れて、で、どないかいけたけどね。料理人がおらんんだらあれですよ。これ、古い手帳やけどこんなん。
- H:ああ。
- B:道頓堀の。
- H:これは免許ですか？
- B:あのね、千日前のとこの近所なんですわ、部屋です。
- H:ああ、ほんなら登録していらっしゃるんですね。
- Y:組合というか、あるわけね。
- B:これは大阪におるときに円弘志とテレビに出たんですよ。
- H:ああ、この後ろのこちらですか？Bさんは。
- B:僕は帽子かぶってる方。
- H:なるほど。男前だったと。
- B:だいぶ若いとき。
- H:それで人生いろんな人気があった、男前や。ハハ。
- B:これもね、大阪の一番大きい会社の社長の店ですわ。
- Y:うーん。
- B:あのテレビでも、高校野球に連続でコマーシャルやっとなった、十川ゴムの社長の店が100人ぐらい入る店やけど、B君来てくれへんか言うて僕開店したんや、若い衆何人かつれて、3人程つれて。
- B:爪楊枝ですわ。爪楊枝入れ、あの、そういうの趣味でやってる人おるから。僕にくれたんや。
- H:これね千代紙で。そしたら、Bさんのいろんな人生の中でこの団地で言うのは、そんなにドロドロ濃くは無いけれども、のんびりと言うか、良いところではあるんですか？
- B:まあ今はね、のんびり外歩いたら知ってる人がいっぱい声かけてくれるしね。たまたま大阪におった時の人がね、その近所に住んでるんですわ。一緒に働いた主人と一緒にや、びっくりしたよ。来た当時会って。で、大正区におったときよう会った人が樟葉におるんや、樟葉でまたばったり会って。
- A:へえ。
- Y:偶然が多いですな。
- B:偶然や、今も付き合うてるけどね。
- Y:でも、この団地の人たちといろいろ付き合いなさるのは、やっぱり体を悪くされてからですか？
- B:まあ、あの八寿園へ行ってからね、歌、歌いに。それでカラオケ部に入ってるから、たいがい。
- Y:それはまだお体を悪くされる前から、養老院でお仕事なさってた時から？
- B:いやいや、体悪くしてこうやって歩けるようになってから、こういうところある言うて、老人ホーム入ったり、全部入ってます僕は。みどり会もある。
- Y:当時働いておられるときは、そんなゆっくりする時間はありませんな。
- B:そうそう、そんなん行く暇も無かったです。倒れてこないになってから、先生は歩かなあかんよとか、声出さなあかんよとか言われて、声出すんやったら歌があるよいうて八寿園行ったんです。んで、好きな歌も歌えるしそこで習う歌があるんや、今40人ほどおるわ。
- Y:あー、そうですか。
- B:火曜日がその日ですわ、月に3回あるんです。そういう人がこの近所にいっぱいいます。名前はわからへんけど顔はわかる。
- H:便利ですよ、この場所

B: うちは9階やけど、エレベーターがあるから階段上がりでもええし。

Y: ずいぶん変化が大きい人生をおくられましたですね。

B: まだまだ言うたらキリがないくらい。

H: 10キロ通って、隣の家まで声も届かん位の環境がスタートラインで、いろんな便利なところが。僕の母方の祖父も高知の山のところからね、同じくやっぱり大阪に働きに出てきたんですよ。だから何かその時代の。

B: 高知もね、室戸あって、あのはりまや橋まで遠いやんか、高知までね。うちのおふくろの先祖はね高知城の神主しとった。うちの親父の兄弟は、僕は本籍は岡山ですもん、備前長船、刀のところね、あれが先祖。だから岡山の墓へ帰ったらもう先祖の墓から、その前新幹線がビヤーっと走って、川の上を。備前焼っておまっしやる器の、あの近所や。今田んぼが5町おます。そやからその田んぼ一反でも売ろう思ったら僕のはんこが無かったら売られへんねん。僕が生きてる間は。

A: 面白い。

H: 壮大なお話の中の。

A: ちょくちょく聞いてたんですけど、通して聞くとすごい。

H: 映画を2本ぐらい見てるような。

B: んで、池田牧場とも親戚になる。今の天皇陛下の姉さんが嫁に行ってた池田牧場。そのおっちゃんとは僕2回会うてる、今元気にやってるかどうか知らんけど。そこへ僕仕事に行って、こんなちっちゃい子が跡継ぎになったときの仕事に行った、東本願寺。で、東本願寺に大きい庭ちゅうんがある、そこで晩餐会に呼ばれて。

H: 子供の頃からのBさんの波瀾万丈な人生と比べて、例えば団地の中で本当に小学生の頃から育つ人たち、ずっとここで人生を過ごす人たちというのと、だいぶ違いますよね、それはどう思われますか？

B: ああそりやもう今の子はええなあ。

H: 幸せ、ハハハ。

B: 僕らもう何せ学校へ行く暇が無いぐらい働かなあかんやんか、山の物しか食えへんやん。山におったから食えるもんはたいがい取ったり、渋柿なんかやったら手でな、芋やったら干してきれいにしてまた干してケンピにしたり。昔はもう米とかさういう、野稲まで作った事ある。水が無いから畑に稲を植える。麦とかも植えた。だから食べるものはほとんど自分で作った。

H: 僕の親父も高野山へ疎開して、高野山の学校の校長はそっちじゃないですか、高野山から橋本の下まで学校通ったから、それもやっぱり10キロやそこの。

B: 高野山ね。

H: トリモチで鳥とって食ったりとかね

B: 高野山もいったから。

H: 魚食ってました。

B: 昔ね、木をねこう叩いたらトリモチになるねん、で昔はメジロをよう獲ったんや、で、町からメジロ、今はあかんけど食べにくる人おったんや。でメジロ50羽くらいこう獲ったんや。自分でかご編んで。

H: 食べる、命かかってるからモリのちょっとしたこう、モリのバネのやつとか真剣というか、物事に集中する

というか。

B: そんなんもうトリモチはぱっと止まったらすっと取りにいってね。自分でジーとメジロを、メジロの声馴らして囀はめんたをおいといてね、ツーツーツー言うて鳴くわけや。ほんならおんたがくるわけや。ならバツとしてぐっとかごに入れて、でそれを売ってくれ言うて、よう売ったことある。

Y: そうですか。大変やけど生きてる実感がありますな。

H: それは幸せって言ったら幸せな世界。そういう世界は。

B: 小さい草履作っては自分で売ったりね、学校へ持っていったら売れるから。普通5円で売るところを2足5円で売るとかね。あの時分5円がね、金持ちの子はな、昔なんかティッシュなんかあれへんねんや、新聞紙かなんかで。「お前、尻なんで拭いてんねん」いうたら、「お札で拭いてる」あほかいうて。

一同: ハハハ

B: なあ、お前んとこ金持ちか知らんけどそんなもんで拭くもんちがうで。俺が中学校一年のときやったかな、まだ山の学校へ行ってたときや、2年生になってから町のところへ行ったらね、中学校一年のときは僕は一人で通ったもん。それも遠かった、中学校。今ほれ、ゆずの里っておまっしやる、ナビカワ村のゆずとかいうて、ほんで馬路村とかいうて。

Y: あー柚子ねはいはい。ボン酢を作ったりしてますね。

B: あそこらもう、うちの親戚がやるところもある。ほんでナビカワ村いうところへ行つとった、小学校、山から。

Y: あーそうですか。高知の山は高いからね。

B: まあ小さい分は働きだしてからはそんな苦労は無かったけども。食べるものでも大勢来たときはね、食べるもん少なかったもん、はっきり言うて。あの時代コーヒーでも15円やったかな、一杯。で大阪の知事さんと僕は全国放送やってたんや。僕が国際ホテルにおるとき。テレビ局全部インタビューされて、田舎から電話かかって、兄ちゃんテレビ出とったやろ！言うてな。全国放送やNHKも出てるし、もう、ね。でその知事さんは死んでおれへんけどね、今マイドーム大阪の横に墓があるわ。その知事さんの。そのときに僕100人ぐらいのお客さんにすいとん作って出した。もう出すもんじゃないから、ムカデとかパッタやとかあんなも焼いて食べるようにしたあるんやけど、皆それは食べへんやん。昔はこういうものを食べとったいうのを出した。

Y: うん。

B: そやから昔はもう食べれるもんは粗末せんと食べてたもん。そういう料理を出したんです。それはね、上六かどっかの大きい会館でやったんですわ。そのとき100人ほど来たかな。もう、うちそのすいとんだけ出した。そや言うてもこんなに昔美味しなかったよ。美味しなかったら皆食うてくれへんから、ちょっと味つけたんや。そうでっしやる。

Y: そうですな、塩味ついとったらええぐらいのもんですな、昔は。

B: だから知事さん、大阪の役所おまっしやる、あそこへもよう弁当持っていったりあそこで握ったりしたもん

- や。
- Y: パーティーあったら。
- B: 大正製薬の本社に行って100人ぐらいのパーティーやからいうて、そこでも寿司握ったりそば作ったり。PLが優勝したから言うてPL学院まで何百人分も持って行って、仕事に。まあ忙しかった。
- H: 今は暮らすにはちょうどいいぐらいですか？
- B: 今は嫁とおれだけやから、こないなってからな、もう嫁はんは頭が上がりまへん。はいはい言わなあかん。
- Y: 奥さんはぜんぜんお元気なんですか？
- B: うん、元気です。
- Y: そうですか。
- B: 僕が歩けんようになってからね、もうどこも行けんようになってからね、要るやんか、人が。まああいうところに入ったらええこっちゃやけどね。
- H: 申し込んだときのエレベーターの9階ってのは、たまたまですよ。ちょうど良かったですよ。離れたところの階段のところだね、全然違いますよ。
- B: そうそう。ここやったらええわ、エレベーターやし、荷物運んでもぐーとね。それでも僕はあっちこち宿替えるだけでも大変やった。今までで何軒宿替えたか。
- Y: お子さんはもう全部奥さんにまかせっぱなしでしたね、そしたら。
- B: そうそう。僕も仕事一途に、大阪に着くの一番バスで行った、たいがい。あの地震のときでも揺れたけどバスは走った。でバスに乗ったら樟葉に着く前にまた町の中でかなり揺れてね、で樟葉着いたら電車8時まで走りません言われて、京阪。今日予約聞いてるのになと思ってね、僕そのとき商工会議所やったから100人ほどの予約聞いてったんよ。で、いろんなキャンセルしてきたんやわ。電話もでられへん、誰も行ってないから。んで、キャンセルなってしもうて、仕入れ先こっちもキャンセルして、そのうちに電話も通じひんようになってね。で、あのとき淀屋橋から歩いた本町まで。あの時がもう、9階でっしゃろ、ガラスもひっくり返ってるし、もう気づけて子供も寝られへんし、9階揺れてね。こうやって開くやつはバツと開きましたわ。こういうやつは開けへん。なんちゅうかな、地震も恐い。昔はよう言われたんよ、四国におっても大きい地震あったよ、上から大きい石が転がってきたりね。昔小さいとき聞いたんは地震、雷、火事、親父いうてよう言われとった。
- H: もしエレベーターの無いところにお住まいだったら今どうされてますかね。5階とかで階段上らなあかところやったら。
- B: 今やったら替ってるな。エレベーターで良かったですよ。やっぱりここなんぼ当たっても、今やったら下の方空いてるところもあるよ、どこの団地でもね。上におった人が下に替ったり、もう年寄りやから上まで歩かせなくて替えてもうたりね。今は年配の人が多なからね、子供みたいなもんが少くないもん。だから、また会えたらまた話しますわ。
- Y: ありがとうございます。すごい僕らが普段体験できないようなお話をいっぱい聞かせていただいたから。
- B: 人生皆それぞれ違うやろけど、昔の人は苦労してるもん。なんやかんやと。
- Y: ちょうど時代が変化する間をずっと生きて来られたんですよ。
- B: 呉におったとき、もう空襲警報であの焼夷弾だの、石みたいなんブアーっと雨のように降ってくるからあれで死ぬ人。爆弾と違って焼夷弾言うたらもう・・・
- Y: 数がいっぱいだから。
- B: ほらもう、金のならんイモリみたいなんがブアーって降ってくるんや。それ僕子供のとき拾てね、ギザギザなって手も切れそうやった、そんなんや。針みたいになってた。そんなんが雨のようやった。
- Y: それをばらまくんですな。
- B: 飛行機からばらばらと。B29!言うたらもう空真っ暗なってる。そやから何時も防空頭巾はここへかけとった。あんなもん頭当たたらいちこるや。
- Y: でもその頃の事はまだ小さかったから。
- B: 5歳やったからあんまり覚えてへんけど、何せ一番先逃げとったから。
- Y: その後小学校変わりながら、中学校までの間の山の生活というのがなかなかすごい。体験としては記憶に残ってる。
- B: 記憶には残ってるね。もう、今の頃よりはその時の苦労したことやいろんなことは残ってるんですよ。
- Y: 今となっては良い思い出として残ってることも多いですよ。
- B: そういう事は頭の底に入ってるわけよ。今聞いたものすぐ忘れるんやんか、今やったら。あんたの名前聞いても出たら忘れるわ。そんなんや、顔はわかっっても。
- Y: ありがとうございます。気をつけて帰ってくださいね。またこの辺でお目にかかることあると思いますから。
- B: 家はどこに？
- H: 家兵庫県なんですよ。遠くから来てるんです、私。
- B: 兵庫県から来てますの。
- Y: 僕は大阪です。
- B: 大阪のどこですか。
- Y: 大阪の天王寺の辺りです。
- B: あ天王寺、天王寺から。今から帰るの？
- Y: 帰ります。今日は大正区の話だとか、色んな場所の話が出ましたが、だいたい全部、土地勘あるというかわかります。
- H: この研究と言うかヒアリングみたいなものは、まだこれからしばらく続きますので、たまに2人でまたこちらに。
- B: また寄ってくれたらな。
- H: ぜひまた顔を拝見させてください。
- B: 僕も一日でも長生きしたいと。
- H: ぜひぜひ。
- Y: 学生諸君がずいぶんお世話になってると聞いていますので、またそちらの方もよろしくお願ひします。いやほんとに今日はありがとうございました。
- 一同: ありがとうございます。

以上